

戦後工業製品の流通に関する一考察-沖縄における清涼飲料水瓶-

石田 卓也

I はじめに 問題の所在

1. はじめに

今日、沖縄県は土産物としても人気を誇る「琉球ガラス」に代表されるように、全国でも随一と言われる¹ガラス工芸が盛んな地域となっている。そのようになった経緯についてここでは詳しい記述を避けるが、理由の一つには、戦後 27 年に及ぶ米軍政府などによる統治²を経験し、産業文化面でも米国から多くの影響を受けた戦後沖縄の歩みが反映されていることをあげることができる。当時から沖縄におけるガラス製造の原料として利用されたのが、「コカ・コーラ」、「ペプシコーラ」などの、もとは米国資本のコーラ瓶や、日本のガラス製造業者が製造し、沖縄の清涼飲料業者などがボトリングしたジュース瓶（清涼飲料水瓶）であった。のちに製品を指して「琉球ガラス」と呼ばれるようになる沖縄のガラス工芸文化は、これらに牛乳瓶、ビール瓶などを加えた廃瓶が原料となって支えていたのである。ではかつての沖縄には、いったいどのような瓶が存在していたのであろうか。

2. 問題の所在

今世紀に入り、考古学や歴史学、民俗学の分野でもガラス瓶研究が増加しはじめた（角南 2019）。背景には、発掘資料として報告されるガラス瓶資料の増加がある。縄文時代研究者でもある桜井準也は、「コカ・コーラ」及び「ペプシコーラ」のレギュラーサイズ瓶について、コレクターによる分類案を参考に型式学的な検討を試み、独自の分類編年案を提示した（桜井 2019）。沖縄においては 1980 年代より「戦跡考古学」が提唱され、沖縄戦などに関わる遺構や遺物を調査研究する必要性が指摘されていた（當眞 1984）。ビール瓶や薬品瓶などのガラス瓶自体は県内自治体発行の町史や発掘報告書でも比較的早くから報告されていたが（西原町町史編纂委員会 1996、南風原町教育委員会 2000）、近年では桜井や、琉球ガラス史研究家の河西大地による成果を受け、本稿でも扱うコーラ瓶が報告される例も出てきた（沖縄県立埋蔵文化財センター 2019、2022）。桜井が提示した分類編年案を用い、採集したコーラ瓶を分析した論考もある（佐藤 2021）。ガラス瓶、清涼飲料水瓶は埋蔵文化財としても、着実に重要性を増している。

先にも触れたが、沖縄では戦後、米国資本に続いて島内資本による清涼飲料業者が 1950 年代より林立した。これらの瓶についてはコレクター個人が自身のホームページにて紹介しているほか、県内の博物館に展示されるなど県民にとって馴染み深い品であることが伺えるが、分野を問わず学術的な検討はほぼ皆無と言っていい状況にある。戦後に出現した新しい製品であることもあり、発掘報告書への掲載例もない。桜井は、「ガラス瓶はあくまで容器であるため中身がなくなったらすぐに捨てられる運命にある」ことから、「遺構の構築年代や遺物の廃棄年代を推測するために極めて有効な資料である」とするなど、近現代考古学におけるガラス瓶の重要性を提起した（桜井 2019）。先学を踏まえつつ、戦後沖縄で流通していた清涼飲料水瓶に資料的評価を与えることは、考古学以外の分野においても、今後、米軍統治時代を含む戦後沖縄の物質文化や社会経済の解明において有用となろう。

¹ 琉球ガラスの工房数は 2018 年現在で 30 に上り、年間生産額は十数億円に上る（河西 2018）。

² 1945～72 年：本稿では「米軍統治時代」に統一した。

本稿では、主に個人からの寄贈や採集などによって本市教育委員会が所蔵している清涼飲料水瓶を、考古学的な手法や文献資料などと照合・分析・考察し、戦後沖縄におけるガラス瓶の流通状況の一端を垣間見たい。また、本稿で使用した資料及び資料写真は令和3年度デジタル博物館事業によるものであることから、終章では筆者が考える、デジタルアーカイブを含む博物館資料としてガラス瓶が持ちうる課題や可能性についても述べることにする。

II 戦後沖縄における清涼飲料水の展開

本論に移るにあたり、主に戦後から日本復帰前後に至るまでの沖縄における清涼飲料業者の展開を概観しておきたい。

1. コカ・コーラの上陸、外資業者の参入

1886年、米国アトランタの薬剤師ペン・パートンによって考案されたコカ・コーラは、米国内で圧倒的な支持を得つつ、海外派兵の米軍兵士とともに世界中に波及する。わが国では「明治屋」によって1914年に初めて輸入されたが、戦前においては贅沢品に留まっていた。沖縄島には太平洋戦争末期の1945年4月以降の米軍上陸、占領後、駐留米兵向けにコカ・コーラが供給され始める。8月の終戦以後は、日本本土にも進駐軍によって大量に持ち込まれた。

1946年1月29日、GHQ（連合国軍総司令部）指令により北緯30度以南の南西諸島における日本政府の施政権が停止されたことを受け、「ザ・コカ・コーラ エクスポート コーポレーション（CCEC）³」沖縄支社の設立が決まると、同年10月、浦添村（現浦添市）伊祖の丘陵地⁴に工場が完成し、190ml瓶にて軍売店への配送が始まる。当時は民間での販売が認められていなかったため、「闇市場」にて高価で取引された（沖縄コカ・コーラボトリング株式会社 2018）。また、この頃から空き瓶を利用した「コーラコップ⁵」が沖縄の人々によって作られるようになる。米兵などが廃棄した瓶を熱したワイヤーなどで擦り、冷水に浸すなどの方法で半分に切断したもので、下半分はコップとして喫茶や飲酒に使用され、傘のようになった上半分は風鈴や漏斗としても使われた。のちに陶器の食器が流通し始めると、コーラコップは姿を消すことになるが、「カンカラ三線」や「ボンベ鐘」などとともに、現在では戦後の困難な時代を沖縄の人々がたくましく生きたことを象徴する品として、県内各地の博物館でも見ることができる。

1951年、米民政府の民政官 J・M ルイス大佐がコカ・コーラ民間販売の権利を、戦前から貿易商や那覇市議を務めるなど有力者として知られていた又吉世澤に認可する。同年9月、又吉は沖縄コカ・コーラボトリングスの前身となる「国際商事合名会社」を設立し、民間販売を開始する。日本「本土」で原液の輸入が解禁されたことを受けて「日本コカ・コーラ（株）」の前身である「日本飲料工業（株）」が原液供給元として設立され、コカ・コーラ事業が本格開始されたのが1957年であるから、沖縄ではそれより6年ほど早くコカ・コーラの民間販売が始まっていたことになる。

以上のようにしてコカ・コーラは沖縄の清涼飲料業界の嚆矢となったわけであるが、これに続いて1950年、「（株）沖縄バヤリース⁶」の前身となる「バヤリース・カリフォルニア・オレンジ」社が設立

³ これより前年の1945年10月、横浜に日本支社が開設されており、沖縄支社の設立は、日本「本土」から分離された沖縄の米兵及びその家族へのコカ・コーラの供給を目的としていた（沖縄コカ・コーラボトリング株式会社 2018）。

⁴ 2022年現在、「沖縄コカ・コーラボトリング」本社が所在している。

⁵ 町田市立博物館の齊藤晴子による名称であるが、他にも複数呼称がある。当時は単に「コップ」と呼ばれていた（河西 2018）。（沖縄コカ・コーラボトリング株式会社 2018）は「琉球ガラスの原点」としている。

⁶ 2014年12月に解散のち、製造、販売権は「アサヒオリオンカルピス（株）」に譲渡された。

され、翌年には民間販売もスタートした⁷。米ペプシコ社が製造販売する「ペプシコーラ」は、1947年より日本本土にて進駐軍向けに提供されていたが⁸、沖縄では1954年4月にハワイ移民2世の比嘉悦雄のもとで「与那城ババレッチカンパニー（株）」が設立され、軍民双方に提供されるに至った（河野・村山2008）。

2. 島内資本業者の勃興

相次ぐ外資系業者の進出に続き、負けじと島内資本の業者も設立が始まる。1953年、ハワイ移民帰りの実業家・屋比久孟吉が「ベストソーダ合資会社」を興した。琉球政府による島内産業保護措置も受け、外資製品より安く販売できたこともあり、5年後には全琉でシェア20%を占めるまでに成長したほか、島内資本業者では初めて米軍基地内での販売免許も取得する。1950～60年代にかけ、一時は26社とも言われる島内業者が、外資系業者と熾烈な販売競争を繰り広げたが、1969年10月に琉球政府が発がん性などの疑いがあるとして人工甘味料チクロを禁止すると、そのあおりを受けて島内業者は急激に姿を消していく。沖縄の日本復帰後は本土飲料業界の攻勢に押され、1975年頃にはベストソーダも店頭から消えてしまった（海野2012）。

島内飲料業者の興亡の詳細については不明点が多く、今後も検討の余地があろう。

III 分析・考察

本稿で扱う資料は、大半が戦後に製造された清涼飲料水瓶という共通点を持ち、用途も年代幅も比較的限られたものであることから、すでに桜井準也が分類編年案を発表している「コカ・コーラ」、「ペプシコーラ」を除いては、大きな型式変化を見出すことは難しい。そこで、瓶に含まれる情報のうち、桜井がまとめたガラス瓶の特徴（桜井2019）を参考に、以下のような点に着目し、豊見城市教育委員会が所蔵する清涼飲料水瓶のおよその製造年代を割り出すことを試みた。以下、筆者が考える優先順位の高い順に列挙したが、あくまでも相互の情報が補完しあって初めて年代が推定できるのであり⁹、調査の際は①～⑪全てを記録することが肝要である。また、Ⅱ章で述べたような歴史的状況を把握しておくことも、年代推定の助けとなろう。方法の詳細は、対象資料それぞれの項にて適宜述べることにする。対象資料の総計は172点であり、品目ごとに以下の情報を記載した観察表を作成した¹⁰。

本分析にあたっては、法人や個人によるWebサイトも参考とした。以下⑥「製瓶業者の商標」の同定には、「日本ガラスびん協会¹¹」、「漂流乳業¹²」のWebサイトを、また、以下の情報を用いても年代特定が困難な場合など、参考情報として沖縄のガラス瓶収集家が開設するWebサイト『ボトルライブラリー¹³』を用いた。瓶の各部位の呼称は、桜井が採用する山本孝造の図に準拠した（桜井2019、山本1990）【図1】。

尚、紙幅の都合上、比較的資料数が少ない品目については本章での解説を割愛し、次章「小結 今後の課題」にて品名のみ扱うこととした¹⁴。

⁷ 「沖縄アサヒ飲料」 https://www.asahiinryo.co.jp/okinawa_bireleys/sp/（2022年3月13日閲覧）

⁸ 民間への販売は1957年に開始された。

⁹ 特に①は、他の条件を満たして初めて信憑性を帯びる。

¹⁰ 表には必要に応じて「名称」欄や「備考」欄を設けた。

¹¹ 「日本ガラスびん協会」 <http://glassbottle.org/about/factory/>（2022年3月25日閲覧）

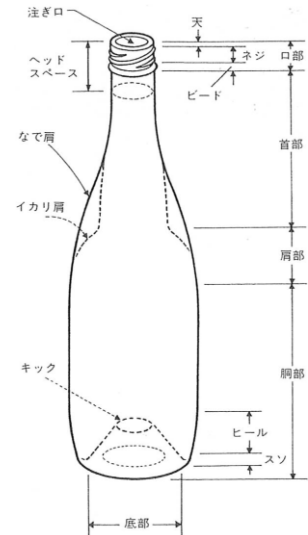
¹² 「漂流乳業」 <https://www.citymilk.net/info.htm>（2022年3月25日閲覧）

¹³ 「ボトルライブラリー」 <http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/bin.htm>（2022年3月25日閲覧）

¹⁴ 割愛した品目は、「ファンダ」、「スプライト」、「キープ」、「HI-C」、「シャスタ」、「サンサンクリームソーダ」、「ひばりジュース」、「オリオンサイダー」、「ウイソク」、「レモンソーダ」、「ミネラル」、「ミッシェン」、「グラベット」、「スコール」、「バブルアップ」、「マウンテンデュー」である。

◎調査の際に記録すべき事項

- ① 製造年を示すエンボス¹⁵ (陽刻：ある場合)
- ② 「ラグ・ディンプル¹⁶」の有無 (戦前 or 戦後) 【図 3】
- ③ 底面のナーリング加工¹⁷の有無 【図 2】
- ④ 「失能的成体 (痕跡器官)」 (ラインなど) の有無、形態¹⁸
例：縦ライン、ウェーブライン、スワールラインなど
- ⑤ 商標の表示方法
例：ACL、エンボス、ラベルなど
- ⑥ 製瓶業者の商標エンボス
- ⑦ 容量の表記法¹⁹
例：オンス (FL.OZ)、ml、cc など
- ⑧ 製造者及びその住所の表記
- ⑨ 色調
- ⑩ 法量 (高さ、幅 (底径)、重量、容量)
- ⑪ 資料の入手方法、採集地など (本稿では省略)



【図 1】瓶各部位の呼称(桜井 2019,山本 1990)

○製瓶業者について

今回分析対象とした資料からは、「日本硝子」、「山村硝子²⁰」、「新東洋硝子²¹」、「石塚硝子」などの商標エンボスを確認した。それぞれの業者に商標の変遷や各工場ごとのバリエーションが見られ、そこから年代や生産地を推定することができる【図 4】。以下、品目ごとに分析結果の所見を述べることにする。



【図 2】ナーリング加工を持つ資料(左)と持たない資料(右)



【図 3】中央の臍がラグ・ディンプル(○の中)

石	石塚硝子	H	広島硝子工業
I		⊗	
I		⊕	
T	東洋ガラス (70年頃まで)	NT	日本耐酸塩工業
T	東洋ガラス (70年頃以降)	◇	第一硝子
山	山村硝子 (65年頃まで)	SN	新日本硝子
Y	山村硝子 (60年代以降)	⊖	ユニオン硝子工業
Y		☆	大和硝子
N	日本硝子		

※ 1…製造工場を表わすアルファベット 1文字
 ※ 2…製造工場を表わす 1~4 の数字

【図 4】主な製瓶業者の記号(桜井 2019,栗原 2005)

¹⁵ 陽刻

¹⁶ ACL 印刷 (瓶に直接施す印刷) の際、瓶を固定するための臍。戦後から登場したため、生産年が戦前か戦後かの指標となる。

¹⁷ 瓶の割れ防止の加工。概ね 1960 年代以前 or 以後の指標となる。底面の細かなキズが割れの原因となるため施された。

¹⁸ 本稿では、桜井の指摘したコーラ瓶の「失能的成体 (痕跡器官)」が、島内資本飲料瓶にも存在することを確認した。

¹⁹ 一部製品では、沖縄の日本復帰以前、以後の指標となることもある。

²⁰ 日本硝子と山村硝子は 1998 年に合併し、「日本山村硝子」となった (「漂流乳業」より)。

²¹ 1967 年より、「東洋ガラス」に改称 (「漂流乳業」より)。

1. コカ・コーラ

沖縄におけるコカ・コーラ社の黎明期はⅡ章で概観した通りである。その後の展開を述べると、CCEC 沖縄支社のマネージャーW・E マチエットが、1956年に沖縄ソフトドリンクス合名会社を設立、翌年、民間販売を行っていた国際商事を吸収合併する。この間、後発のペプシコーラやバヤリース、島内資本業者の台頭や、社内での労働闘争などもあり低迷期が続いていた。このような状況を受け、マチエットは1966年秋に沖縄におけるコカ・コーラ事業の譲渡を日本コカ・コーラ社に申し出ると、緊密な関係にあった東京コカ・コーラボトリング社の支援のもと、紆余曲折を経て1968年3月、「沖縄コカ・コーラボトリング社」が設立され、現在に至る（沖縄コカ・コーラボトリング株式会社 2018）。

コカ・コーラ瓶は計 20 点を対象とした。これについてはすでに桜井の分類編年案（桜井分類：桜井 2019）がある。河西も「コーラ瓶の腰には製造年がエンボスされていることが多い」と述べており（河西 2018）、年代決定は比較的容易である。瓶の特徴をもとに桜井分類に当てはめ、「腰」のエンボスを元に古い順に並べてみると、桜井分類と河西の指摘は整合することが確認できる【表 1】。

No.	W 幅(横)	H 高さ(縦)	重量	容量	製造者・住所表記	ビン製造者	製造年代	色調	ナーリング	ラグ・ディンプル	ラインの形態	商標表記法	桜井分類
1	5.8cm	19.8cm	0.40kg	180ml	なし	不明	1944	青緑	×	×	縦ライン	エンボス(肩部)	Ⅲa式1類
2	5.8cm	19.8cm	0.40kg	180ml	なし	Owens-Illinois	1945	無色	×	×	縦ライン	エンボス(肩部)	Ⅲa式1類
3	6.0cm	19.5cm	0.40kg	180ml	なし	Owens-Illinois	1945	無色	×	×	縦ライン	エンボス(肩部)	Ⅲa式1類
4	6.0cm	19.8cm	0.40kg	180ml	なし	Owens-Illinois	1945	無色	×	×	縦ライン	エンボス(肩部)	Ⅲa式1類
5	5.8cm	19.5cm	0.40kg	180ml	なし	Owens-Illinois	1945	無色	×	×	縦ライン	エンボス(肩部)	Ⅲa式1類
6	5.8cm	19.8cm	0.40kg	180ml	なし	Owens-Illinois	1945	無色	×	×	縦ライン	エンボス(肩部)	Ⅲa式1類
7	5.8cm	19.5cm	0.40kg	180ml	なし	Owens-Illinois	1946	無色	×	×	縦ライン	エンボス(肩部)	Ⅲa式1類
8	5.5cm	19.8cm	0.40kg	190ml (6.5FL.OZ)	なし	日本硝子	1969	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	Ⅲb式2類前期
9	6.3cm	28.5cm	0.52kg	190ml (6.5FL.OZ)	なし	日本硝子	1969	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	対象外 (Ⅲb式2類後 期に類似)
10	5.3cm	19.8cm	0.40kg	190ml (6.5FL.OZ)	なし	日本硝子	1970	青緑	○	○	縦ライン	エンボス(肩部)	ⅢaⅢb 折衷型
11	5.5cm	19.8cm	0.40kg	190ml (6.5FL.OZ)	なし	日本硝子	1971	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	Ⅲb式2類前期
12	6.3cm	28.5cm	0.58kg	500ml	なし	東洋ガラス・川崎工場	1976	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	対象外 (Ⅲb式2類後 期に類似)
13	5.5cm	20.0cm	0.40kg	190ml (6.5FL.OZ)	なし	不明	1984	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	Ⅲb式2類後期
14	5.5cm	20.0cm	0.36kg	190ml (6.5FL.OZ)	なし	日本硝子	1988	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	Ⅲc式1類
15	6.3cm	28.5cm	0.58kg	500ml	なし	日本硝子	1988	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	対象外 (Ⅲb式2類後 期に類似)
16	5.5cm	20.0cm	0.36kg	190ml (6.5FL.OZ)	なし	日本硝子	1989	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	Ⅲc式1類
17	5.5cm	19.9cm	0.36kg	190ml (6.5FL.OZ)	なし	日本硝子	1989	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	Ⅲc式1類
18	5.5cm	19.8cm	0.40kg	190ml (6.5FL.OZ)	なし	日本硝子	1980年代	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	Ⅲb式2類後期
19	5.5cm	20cm	0.38kg	190ml (6.5FL.OZ)	なし	日本硝子	1995	青緑	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	Ⅲc式2類
20	5.7cm	20.0cm	0.24kg	250ml	利根コカ・コーラ ボトリング(株) 千葉県野田市巾 根310	日本硝子	1996	無色	○	○	縦ライン	ACL(肩部)	対象外

【表 1】コカ・コーラ瓶の観察表

対象資料計 20 本のうち 7 本は、肩部の商標表示がエンボス加工であり、ラグ・ディンプル及びナーリング加工を持たず、「腰」にあたる胴部分に「44」または「45」のエンボス加工を持ち、色調は無色透明であることから、桜井分類におけるⅢa 式 1 類に相当することがわかる。製瓶業者は「腰」のエンボスから「Owens-Illinois-Glass」社製であり、1943～46 年にかけて製造された戦地用モデルで、日本では戦後、「占領軍米兵やその関係者によって消費された」とされる（桜井 2019）。近年、沖縄県内における埋蔵文化財発掘調査にて同型のものが報告されている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2019、2022）。胴部に製造年や制瓶業者のエンボスが施されるスタイルは、「スプライト」「ファンタ」「HI-C」

など、他のコカ・コーラ社製品とも共通する特徴である【図5】。

残り13点のうち12点は県外の製瓶業者の商標エンボスを持っており、内訳は「日本硝子」が11点、「東洋ガラス・川崎工場」が1点であった。「漂流乳業」によると、コカ・コーラ瓶をはじめ今回対象とする資料全てに陽刻されている「日本硝子」の商標は、1936年から、1998年に「山村硝子」と合併して現行の「日本山村硝子」となるまで使用されたとされる。商標の確認が困難であった1点も、日本本土で生産されたと思われる。年代幅は1969～96年製までを示したが、奇しくも全てが「沖縄コカ・コーラボトリング株式会社」設立以降の製品であることは偶然であろうか。桜井分類は計5種類が確認でき、年代に合わせて多様なバリエーションを見せている。No.10だけは、表示はすべてエンボスであるというⅢa式の特徴を持ちつつ、裏面に「コカ・コーラ」のカタカナ表示が採用されるというⅢb式の要素も併せ持つため、「ⅢaⅢb折衷型」と表記した。

対象資料全ての首部と胴部に桜井が指摘する「縦ライン」が見られるが【図5】、これは全てが、米国で1916年に模造品対策として採用された「ホップル瓶」と呼ばれるものであることによるもので、日本で流通するコカ・コーラ瓶は原則としてこのデザインである。桜井はホップル瓶すなわち「縦ライン」の出現をもって「Ⅲ式」とし、これは現在のペットボトル容器にも受け継がれている（桜井2019）。外資、島内資本を問わず、ホップル瓶の形状や「縦ライン」を採用しているとみられる他社製品は多くあり、顕著な影響力が伺える。



【図5】 胴部に刻まれるエンボス（○の中）と「縦ライン」



【図6】 左から古い順に配列
（左からⅢa式I類、ⅢaⅢb折衷型、Ⅲc式1類、Ⅲc式2類）

2. ペプシコーラ

ペプシコーラの沖縄上陸については前章で少し触れたが、ここでその後の展開を簡潔に述べる。「ボトルライブラリー」や関連新聞記事によると、1979年に「与那城ベバレッジカンパニー」が製造販売権及び販売権を米ペプシコに売却すると、地元資本が継承の上「琉球ペプシコーラボトリング」が設立される。これに伴う工場拡張やラインの新設ののち、翌1980年には「ペプシコーラ1リットルジャンボサイズ」の、1981年には後述する「マウンテンデュー」1000ml瓶の発売をみることになる²²。

ペプシコーラ瓶は16本を対象とした【図1】。コカ・コーラ瓶と同じく桜井によって分類編年が試みられており、分類が対象とするレギュラーサイズ瓶ではI式（1958年～）、IIa式（1960年代後半～90年代末）の2つが見られた。それ以外では、商標やサイズなどからIIb式の時期（1973年～）に比定できるものが計5点あり、製造年とみられるエンボスが確認できるものも2点みられた（No.13）、

（No.14）。「ボトルライブラリー」は、ACL印刷された商標の裏が「ペプシコーラ（カタカナ表記）」の場合1960～70年代、「PEPSI（英語表記）」は1970～80年代を示すとしていることから、観察表でもそれに倣った。また、桜井分類のI式は、日本本土では民間販売が始まった1958年からの流通であるが

²² 「“ペプシ”社名から消える サントリーフーズ沖縄に」琉球新報 2015年3月25日付 <https://www.rvukyushimpo.jp/news/preentry-240891.html> (2022年3月25日閲覧)

(米国では1940年に登場)、沖縄では「与那城ベバレツヂカンパニー(株)」が設立された1954年から流通していたと考えられる。桜井はコカ・コーラ瓶に「縦ライン」が含まれることを指摘したが、ペプシコーラ瓶にはⅠ式に「ウェーブライン」【図7】が現れ、Ⅱ式以降の胴部を斜めにくびれさせる「スワールライン」に引き継がれるとした。「ウェーブライン」を擁するⅠ式を模倣したとみられるものが島内資本製品に確認できるほか【図8】、「スワールライン」のようなくびれを含むものも複数あり、コカ・コーラ瓶に代表される「縦ライン」と併せて、清涼飲料水瓶における二大様式と捉えることもできよう。同じくペプシコ社の製品である「ミリンダ」も、形状はペプシコーラⅡa式によく似ており、同様のスワールラインを持つ。

No.	W 幅(横)	H 高さ(縦)	重量	質量	製造者・住所	ビン製造者	推定製造年代	色調	ナーリング	ラグ・ディンプル	ラインの形態	商標表記法	桜井分類 (日本本土での流通 時期)
1	5.7cm	22.3cm	0.40kg	236ml (8FL.OZ)	なし	日本硝子	1954?~	無色	○	○	ウェーブライン	エンボス(胴部) ACL(首部、胴部)	Ⅰ式 (1958~)
2	5.5cm	22.3cm	0.38kg	236ml (8FL.OZ)	なし	不明	1954?~	無色	○	○	ウェーブライン	エンボス(胴部) ACL(首部、胴部)	Ⅰ式 (1958~)
3	5.5cm	22.3cm	0.38kg	236ml (8FL.OZ)	なし	不明	1960年代~ 70年代初	無色	×	○	スワールライン	ACL(胴部)	Ⅱa式 (1960年代後半~ 90年代末)
4	5.3cm	22.3cm	0.40kg	236ml (8FL.OZ)	なし	日本硝子	1960年代後半~ 90年代末	無色	○	○	スワールライン	ACL(胴部)	Ⅱa式 (1960年代後半~ 90年代末)
5	5.0cm	22.3cm	0.40kg	236ml (8FL.OZ)	なし	日本硝子	1960年代~ 70年代初	無色	○	○	スワールライン	ACL(胴部)	Ⅱa式 (1960年代後半~ 90年代末)
6	5.2cm	22.3cm	0.40kg	236ml (8FL.OZ)	なし	不明	1960年代~ 70年代初	無色	×	○	スワールライン	ACL(胴部)	Ⅱa式 (1960年代後半~ 90年代末)
7	5.5cm	22.3cm	0.40kg	236ml (8FL.OZ)	なし	不明	1970年代~ 80年代初	無色	○	○	スワールライン	ACL(胴部)	Ⅱa式 (1960年代後半~ 90年代末)
8	5.0cm	22.3cm	0.40kg	236ml (8FL.OZ)	なし	不明	1970年代~ 80年代初	無色	○	○	スワールライン	ACL(胴部)	Ⅱa式 (1960年代後半~ 90年代末)
9	5.0cm	22.0cm	0.40kg	236ml (8FL.OZ)	なし	不明	1970年代~ 80年代初	無色	○	○	スワールライン	ACL(胴部)	Ⅱa式 (1960年代後半~ 90年代末)
10	5.3cm	22.3cm	0.40kg	236ml (8FL.OZ)	なし	不明	1970年代~ 80年代初	無色	×	○	スワールライン	ACL(胴部)	Ⅱa式 (1960年代後半~ 90年代末)
11	5.3cm	22.3cm	0.38kg	236ml (8FL.OZ)	なし	不明	1970年代~ 80年代初	無色	○	○	スワールライン	ACL(胴部)	Ⅱa式 (1960年代後半~ 90年代末)
12	6.3cm	28.4cm	0.52kg	500ml	なし	東洋ガラス・ 川崎工場	1973~	無色	○	○	スワールライン	ACL(胴部)	対象外 (Ⅱb式に類似)
13	6.0cm	28.4cm	0.48kg	500ml	なし	日本硝子	1979?	無色	○	○	スワールライン	ACL(胴部)	対象外 (Ⅱb式に類似)
14	5.5cm	22.3cm	0.66kg	236ml (8FL.OZ)	ペプシコインクRP 東京都港区赤坂1- 9-20(蓋に記載)	日本硝子	1988?	無色	○	○	スワールライン	ACL(胴部)	Ⅱb式 (1973~)
15	5.3cm	16.3cm	0.38kg	200ml	ペプシコインクRP 東京都港区赤坂1- 9-20(蓋に記載)	山村硝子 (60年代~)	1991~1997頃	無色	○	○	無	ACL(胴部)	対象外 (商標はⅡb式)
16	5.3cm	16.3cm	0.38kg	200ml	ペプシコインクRP 東京都港区赤坂1- 9-20(蓋に記載)	山村硝子 (60年代~)	1991~1997頃	無色	○	○	無	ACL(胴部)	対象外 (商標はⅡb式)

【表2】ペプシコーラ瓶の観察表

桜井分類が対象とするレギュラーサイズ瓶の容量は192mlであるが、本稿で対象とする資料は236ml(8オンス)が大半を占めており、192mlのものはない。「ボトルライブラリー」の記述からも、県外とは異なる容量で販売されていたとみることができる。

製瓶業者は、判別できたものでは「日本硝子」4点、「東洋ガラス・川崎工場」1点、山村硝子2点を確認した。他に、手元にある文献では同定できないエンボスを持つ資料もあり、「ボトルライブラリー」の記述も踏まえると米国のメーカーかもしれない【図10】。



【図 7】ペプシコーラ I 式首部のウェーブライン



【図 8】ペプシコーラ I 式(中央)とデザインが類似した瓶
(左・ラッキーコーラ 右・ウィンコーラ)



【図 9】左から古い順に配列(左から I 式、IIa 式、IIa 式、IIb 式)



【図 10】製瓶業者不明の瓶(「M」の上に二重線らしき線がある。)

3. ミスターコーラ

No.	W 幅(横)	H 高さ	重量	容量	製造者・住所表記	ビン製造者	推定製造年代	色調	ナーリング	ラグ・ディンプル	ラインの形態	商標表記法	備考
1	5.5cm	22.0cm	0.40kg	210ml	なし	山村硝子 (60年代~)	~1965頃?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
2	5.3cm	21.8cm	0.40kg	210ml	なし	山村硝子 (60年代~)	~1965頃?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
3	5.3cm	21.8cm	0.40kg	210ml	なし	山村硝子・東京工場	1961頃~?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
4	5.3cm	21.8cm	0.40kg	210ml	合資会社グラベット 宜野湾市志真志	山村硝子・東京工場	1961頃~?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
5	5.0cm	22.0cm	0.40kg	210ml	合資会社グラベット 宜野湾市志真志	山村硝子 (60年代~)	~1960頃?	青緑	×?	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
6	5.3cm	21.8cm	0.40kg	210ml	なし	山村硝子 (60年代~)	~1965頃?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
7	5.0cm	22.0cm	0.40kg	210ml	なし	山村硝子・東京工場	1961頃~?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
8	5.0cm	22.0cm	0.40kg	210ml	なし	山村硝子・東京工場	1961頃~?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
9	5.0cm	22.0cm	0.40kg	210ml	合資会社グラベット 宜野湾市志真志	山村硝子 (60年代~)	~1965頃?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
10	5.0cm	22.0cm	0.40kg	210ml	合資会社グラベット 那覇市繁多川	山村硝子 (60年代~)	~1950年代?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
11	5.0cm	22.0cm	0.40kg	210ml	消失	山村硝子 (60年代~)	~1965頃?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
12	5.0cm	22.0cm	0.40kg	210ml	合資会社グラベット 宜野湾市志真志	山村硝子 (60年代~)	~1960頃?	青緑	×?	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)
13	5.0cm	21.9cm	0.40kg	210ml	消失	山村硝子 (60年代~)	~1965頃?	青緑	○	○	無	エンボス(底部)	1960年4月、志真志に工場が移転。 繁多川は1950年代か (http://www.cosmos.ne.jp/~norio_a.htm を参照)

【表 3】ミスターコーラ瓶の観察表

「ミスターコーラ」瓶は計 13 点を対象としたが【図 11】、法量、容量、色調は全ての資料で大きな違いはない。ナーリング加工が確認しづらいものが 2 点あり、表中では「×?」としたが、経年劣化により消失しただけかもしれない【図 12】。ACL 印刷される製造者住所は「宜野湾市志真志」が 4 本「那覇市繁多川」が 1 点確認できた。「ボトルライブラリー」では「合資会社グラベット」は 1960 年 4 月志真志移転とされているため、(【表 3】「備考」欄参照)「那覇市繁多川」表記のものはそれより古い可能性がある

るが、さらなる検討を要するところである。製瓶業者はバリエーションの違いはあるものの、全てが「山村硝子」社製であることは特筆される。製瓶業者のエンボスなどから、製造年代は全てが概ね 1960 年前後に位置付けられる。



【図 11】ミスターコーラ瓶外観



【図 12】底面にナーリング加工がないタイプ



【図 13】底面にナーリング加工があるタイプ

4. ボンジュースソーダコーラ、ボンジュース、ボンコーラ

No.	名称	W 幅 (横)	H 高さ	重量	容量	製造者・住所表記	ピン製造者	製造年代	色調	ナーリング	ラグ・ディンプル	ラインの形態	商標表記法
1	「ボンジュースソーダコーラ」	5.3cm	21.0cm	0.32kg	200cc (ml)	★大洋化工所所有瓶	山村硝子 (60年代～)	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
2	「ボンジュースソーダコーラ」	5.0cm	21.5cm	0.34kg	200cc (ml)	★大洋化工所所有瓶	山村硝子 (60年代～)	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
3	「ボンジュースソーダコーラ」	5.0cm	21.5cm	0.34kg	200cc (ml)	合資会社大洋化工所 28☆那覇市字松川	不明	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
4	「ボンジュースソーダコーラ」	5.5cm	21.5cm	0.36kg	200cc (ml)	合資会社大洋化工所 28☆那覇市字松川	石塚硝子 (愛知工場か)	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
5	「ボンジュースソーダコーラ」	5.3cm	21.5cm	0.34kg	200cc (ml)	なし	日本硝子	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
6	「ボンジュースソーダコーラ」	5.3cm	21.5cm	5.5cm	200cc (ml)	合資会社大洋化工所 28☆那覇市字松川	山村硝子 (60年代～)	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
7	「ボンジュースソーダコーラ」	5.3cm	21.5cm	0.34kg	200cc (ml)	合資会社大洋化工所 28☆那覇市字松川	日本硝子	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
8	「ボンジュースソーダコーラ」	5.0cm	21.5cm	0.34kg	200cc (ml)	大洋化工所所有瓶	日本硝子	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
9	「ボンジュースソーダコーラ」	5.0cm	21.5cm	0.34kg	200cc (ml)	合資会社大洋化工所 那覇市字松川	山村硝子 (60年代～)	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
10	「ボンジュースソーダコーラ」	5.0cm	21.5cm	0.34kg	200cc (ml)	合資会社大洋化工所 那覇市字松川	山村硝子 (60年代～)	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
11	「ボンジュース」	5.5cm	21.8cm	0.36kg	210cc (ml)	「☆TAIYOKAKOSHOU」 (原文ママ)	欠損により不明	1960以前?	無色	欠損	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
12	「ボンコーラ」	5.3cm	21.8cm	0.36kg	210cc (ml)	(識別不可)KAKOG (識別不可)	山村硝子 (60年代～)	1960頃～	水色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)
13	「ボンソーダコーラ」	5.5cm	22.0cm	0.36kg	210cc (ml)	「☆TAIYOKAKOSHOU」 (原文ママ)	山村硝子 (60年代～)	1960頃～	無色	○	○	縦ライン	エンボス(脚部) ACL(脚部)

【表 4】ボンジュース瓶の観察表

「大洋化工所」が製造・販売していた「ボンジュースソーダコーラ」「ボンジュース」「ボンコーラ」瓶は計 13 点を対象とした。1970 年版『沖縄工業要覧』によると、「大洋化工所」は 1955 年創業で、本社は那覇市松川にあった（琉球工業連合会 1970）。

色調は「ボンコーラ」のみ水色で、残りは無色である。容量は「ボンジュースソーダコーラ」は 200cc (ml)、「ボンジュース」「ボンコーラ」「ボンソーダコーラ」はそれぞれ 210cc (ml) となる。他に製造者表記も、「ボンジュースソーダコーラ」は「大洋化工所所有瓶」あるいは会社名及び住所が漢字表記されるパターン、「ボンジュース」「ボンコーラ」「ボンソーダコーラ」はローマ字表記と、多少の違いがみられる。確認できた製瓶業者の商標エンボスは「山村硝子」7 点、「日本硝子」3 点、「石塚硝子」1 点であり、「石塚硝子」のエンボスは「漂流乳業」によると愛知の本社工場によるもの（1953 年

～)に比定できる。「山村硝子」のエンボス(「Y」のマーク)も1960年代以降であること、底部が欠損したNo.11以外はナーリング加工が確認できることから、全てが概ね1960～70年代の製造とみられる。また、全てが肩部から胴部にかけて「縦ライン」を持っている。

5. その他島内産コーラ

下記は島内資本業者によるコーラ瓶で、計17点を対象とした。品目、数量は以下の通りである。瓶そのものが持つ情報や、「ボトルライブラリー」の参照等により年代を推定した。古い順に列挙した。

- ハートコーラ²³…1点 → キングコーラ…1点
- サンキスコーラ…2点 → ラッキーコーラ…3点
- ロイヤルクラウン(RC)コーラ…3点 →
- ダブルコーラ…3点 → OKコーラ…2点 →
- ウィンコーラ…1点 → クイーンコーラ…1点



【図14】ボンジュース瓶外観

「ハートコーラ」、「キングコーラ」、「サンキスコーラ」、「ロイヤルクラウン(RC)コーラ」、「ダブルコーラ」、「ウィンコーラ」、「OKコーラ」、「クイーンコーラ」はナーリング加工を持たず、うち「キングコーラ」、「サンキスコーラ」はラグ・ディンプルも持たず、商標が肩部あるいは胴部にエンボスされており、「縦ライン」を持つことや、「ホップル瓶」のような形状も併せて桜井分類によるコカ・コーラⅢaⅠ類と類似する。「ボトルライブラリー」によると上記の品目は軒並み1950年代ごろに販売開始されたという記述があることから(【表5】「備考」欄参照)、島内資本業者黎明期の商品であることがわかる。「ハートコーラ」、「サンキスコーラ」、「OKコーラ」は色調が水色であり、黎明期における一つの様式とみることもできる【図15】。同時期に造られていたとみられる「OKコーラ」、「ハートコーラ」、「キングコーラ」、「サンキスコーラ」、「クイーンコーラ」については製瓶業者が不明であり、その後「山村硝子」、「新東洋硝子(東洋ガラス)」、「日本硝子」、「石塚硝子」の商標が陽刻された瓶が現れる。ラインの形態については表に記したとおりであるが、「ペプシコーラ」の項でも触れた通り、「ラッキーコーラ」、「ウィンコーラ」はペプシコーラⅠ式とよく似た形状であり、「ラッキーコーラ」はペプシコーラⅠ式が持つ「ウェーブライン」のような文様を持つ。



【図15】左から、サンキスコーラ、ハートコーラ、OKコーラ



【図16】左から、RCコーラ、ダブルコーラ、クイーンコーラ、キングコーラ

²³ 名称は(河西2018)に準拠。

No.	名称	W 幅(横)	H 高さ	重量	容量	製造者・住所	ピン製造者	推定製造年代	色調	ナーリング	ラグ・ディンプル	ラインの形態	商標表示法	備考
1	「OKコーラ」	5.5cm	19.5cm	0.33kg	200cc(ml)	なし	不明	1950～60年代?	水色	×	○	その他(モザイク?)	エンボス(胴部)	TAIHEI-MINERALSが1955年、具和志市(現在の那覇市)三原で製造販売開始 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/taiminerals.htm 参照)
2	「OKコーラ」	5.0cm	19cm	0.32kg	200cc(ml)	なし	不明	1950～60年代?	水色	×	○	その他(モザイク?)	エンボス(胴部)	TAIHEI-MINERALSが1955年、具和志市(現在の那覇市)三原で製造販売開始 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/taiminerals.htm 参照)
3	「ハートコーラ?」	5.5cm	19.8cm	0.38kg	236ml(8FLOZ)	なし	不明	1950年代?	水色	×	○	縦ライン	無	製造所は ISIKAWA飲料 or HEART 飲料(本部?、年代ともに不明) (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/heart.htm 参照)
4	「キングコーラ」	5.8cm	20.0cm	0.34kg	200cc(ml)	なし	不明	1952～60年代	無色	×	×	縦ライン	エンボス(胴部)	RYUKYU HAKKOU(琉球発祥?) 1952年2月～60年代 那覇市那覇川 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/king.htm 参照)
5	「サンキスココーラ」	5.7cm	19.8cm	0.36kg	210ml	なし	不明	1956～?	水色	×	×	縦ライン	エンボス(胴部)	1956年4月、具和志市那覇(現在の那覇市那覇)で製造販売開始 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/sankisco.htm 参照)
6	「サンキスココーラ」	5.5cm	19.8cm	0.36kg	210ml	なし	不明	1956～?	水色	×	×	縦ライン	エンボス(胴部)	1956年4月、具和志市那覇(現在の那覇市那覇)で製造販売開始 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/sankisco.htm 参照)
7	「ラッキーコーラ」	5.0cm	21.5cm	0.38kg	210ml	ラッキーコーラ(英語表記) 名ゴ町字名ゴ草地又5858	山村硝子 (65年頃までの型)	1957～60年代後半?	無色	○	○	ウェーブライン	ACL(胴部)	ラッキーコーラ 1957～60年代後半? (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/lucky.htm 参照)
8	「ラッキーコーラ」	5.0cm	21.5cm	0.34kg	210ml	ラッキーコーラ(英語表記) 名ゴ町字名ゴ草地又5858	山村硝子 (60年代～)	1957～60年代後半?	無色	○	○	ウェーブライン	ACL(胴部)	ラッキーコーラ 1957～60年代後半? (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/lucky.htm 参照)
9	「ラッキーコーラ」	5.2cm	21.5cm	0.36kg	204ml	ラッキーコーラ(英語表記) 名ゴ町字名ゴ草地又5858	山村硝子 (60年代～)	1957～60年代後半?	無色	○	○	ウェーブライン	ACL(胴部)	ラッキーコーラ 1957～60年代後半? (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/lucky.htm 参照)
10	「ダブルコーラ」	5.5cm	22.0cm	0.40kg	236ml	ベストソーダ株式会社 ■(白い四角) 浦添村字勢理客? ■(白い四角) □(識別不可) CONTE □ □ □ (識別不可) □ □ □ □ □ (識別不可) ■(白い四角) 22 ■(白い四角)	山村硝子 (65年頃までの型)	1964?	無色	×	○	スワールライン	ACL(胴部)	「ベストソーダ株式会社」が販売 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/best.htm 参照)
11	「ロイヤルクラウンコーラ」	5.3cm	22.0cm	0.40kg	236ml(8FLOZ)	なし	新東洋硝子・川崎工場	1966?	無色	×	○	縦ライン	ACL(胴部)	1961年米RCコーラ社と提携し、237mlピンを発売。沖縄での製造は1966年5月セントラルクラウン株式会社那覇市首里東山町で製造販売開始 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/royal.htm 参照)
12	「ロイヤルクラウンコーラ」	5.5cm	22.5cm	0.40kg	236ml(8FLOZ)	ロイヤルクラウンコーラボトリング 那覇市君塚町2丁目98番地7号 (全て英語表記)	日本硝子	1966?	無色	×	○	縦ライン	ACL(胴部)	1961年米RCコーラ社と提携し、237mlピンを発売。沖縄での製造は1966年5月セントラルクラウン株式会社那覇市首里東山町で製造販売開始 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/royal.htm 参照)
13	「ダブルコーラ」	5.7cm	22.0cm	0.38kg	207ml(7FLOZ)	なし	不明	1967?	無色	×	○	スワールライン	ACL(胴部)	「ベストソーダ株式会社」が販売 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/best.htm 参照)
14	「ダブルコーラ」	5.7cm	24.8cm	0.46kg	296ml(10FLOZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客客舎地の宅(原文ママ)	山村硝子 (65年頃までの型)	1967?	無色	×	○	スワールライン	ACL(胴部)	「ベストソーダ株式会社」が販売 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/best.htm 参照)
15	「ロイヤルクラウンコーラ」	5.3cm	22.0cm	0.40kg	236ml(8FLOZ)	なし	東洋ガラス・川崎工場	1969?	無色	×	○	縦ライン	ACL(胴部)	1961年米RCコーラ社と提携し、237mlピンを発売。沖縄での製造は1966年5月セントラルクラウン株式会社那覇市首里東山町で製造販売開始 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/royal.htm 参照)
16	「ウィーンコーラ」	5.4cm	21.0cm	0.34kg	207ml(7FLOZ)	合興会社 大洋化工所 那覇市宇松川1	石塚硝子	1971～?	無色	×	○	無	エンボス(胴部)	1971年大洋化工所が販売開始 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/wine.htm 参照)
17	「ワイーンコーラ」	5.5cm	20.3cm	0.40kg	200cc(ml)	なし	不明	不明	水色	×	○	その他(モザイク?)	エンボス(胴部)	「NESIMURA WORKS」が製造販売 (http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/wine.htm 参照)

【表 5】 その他島内産コーラ瓶の観察表

6. バヤリース

「バヤリース」社の沖縄での展開についてはⅡ章で少し触れた。商品は数種類からなる「バヤリース」ブランド飲料のほか、「サンサンクリームソーダ」も販売していた。

「バヤリース」瓶は14点を対象とした。製瓶業者は「新東洋硝子(東洋ガラス)」が計3点、「日本硝子」が1点、「山村硝子」が10点であった。底面には製瓶業者のエンボスとともに、「64」から「73」までの2ケタの数字が陽刻されているが、容量及び商標の表記方法が「69」までの瓶と「71」以降のそれでは異なっていることに注目したい。「64」から「69」までを示す No.1～No.5 までは肩部に「NET CONTENTS 10FL.OZS.」の記述があり、胴部には、商標とともに「TM.REG.U.S.PAT.OFF.」の文字が陽刻されているが【図 17「旧モデル」】、瓶の形態が異なる No.14を除き、「71」から「73」を示す No.6～No.13 まではそれらの英文表記が姿を消す【図 17「新モデル」】。状況証拠からの推測になるが、底面に陽刻される数字が瓶の製造年を示している場合、上記のようなデザインの変更は1972年の沖縄「日本復帰²⁴」に向けて行ったものとも考えられ、No.1～No.5 までの胴部にエンボスが施されるデザインは「ボンジュースソーダコーラ」や島内産のコーラ、後述する「ベストソーダ」など、50～60年代からみられる比較的古いものであることから、製造年として採用した。また、500ml 瓶である No.11、No.12 は、表中の No.6 以降のものと同デザインが似通っており、胴部に「T3」の文字が陽刻されている。これは「漂

²⁴ 1972年5月15日、琉球列島及び大東諸島の施政権が米国から日本へ返還される。この出来事をめぐっては「祖国復帰」、「本土復帰」、「日本復帰」など、文脈によって様々な呼称がこれまで使われてきたが、本稿では近年の沖縄近代史における研究状況に鑑み、「日本復帰」の語を用いる(前田勇樹ほか2021)。

流乳業」によると「東洋ガラス・滋賀工場」製を示すものとされ、当該工場は1972年操業開始とあることから、日本復帰の年以降に製造されたものであると推測でき、デザインとの整合性が取れる。色調はNo.1「バヤリース 99」、No.14「バヤリース ドラフトルートビア」のみ緑、それ以外は無色であり、No.14 以外には「縦ライン」が施される。



【図 17】バヤリース 新モデル(左) 旧モデル(右)

また、本章前半で(桜井 2019, 栗原 2005)による、製瓶業者の記号一覧表を掲載した【図 4】。その中の「山村硝子」の項には、「65年頃までの型」と「60年代以降」とそれぞれ記される2通りの記号があり、本稿で掲載した観察表でもその記述に準拠したが、「バヤリース」瓶においては、製造年と推定した根拠である数字エンボスが「69」から「73」を示すものまで(【表 12】No.5~No.14)、「65年頃までの型」が見られた。一覧表にあるのはあくまで「65年頃」の記述であり、他の品目でも「65」以上の数字エンボスを持つ資料は決して少なくないが、70年代製造と推定されるものまで「65年頃までの型」が陽刻されるのは「バヤリース」のみである。

No.	銘柄名	W 幅(横)	H 高さ	重量	容量	製造者・住所表記	ビン製造者	推定製造年代	色調	ナーリング	ラグ・ディンプル	ラインの形態	商標表示法	備考
1	「バヤリース 99」	5.5cm	23.8cm	0.40kg	10FL.OZ. (296ml)	なし	新東洋硝子 川崎工場	1964?	緑	○	○	縦ライン	ACL(両部) エンボス(両部)	[NET CONTENTS 10FL.OZS.] [TM.REG.U.S.PAT.OFF.] の記述あり
2	「バヤリース」	5.8cm	23.8cm	0.40kg	10FL.OZ. (296ml)	なし	日本硝子	1964?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部) エンボス(両部)	[NET CONTENTS 10FL.OZS.] [TM.REG.U.S.PAT.OFF.] の記述あり
3	「バヤリース」	5.5cm	23.8cm	0.40kg	10FL.OZ. (296ml)	なし	山村硝子 (65年頃までの型)	1965?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部) エンボス(両部)	[NET CONTENTS 10FL.OZS.] [TM.REG.U.S.PAT.OFF.] の記述あり
4	「バヤリース COLA」	5.5cm	23.8cm	0.40kg	10FL.OZ. (296ml)	なし	山村硝子 (65年頃までの型)	1965?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部) エンボス(両部)	[NET CONTENTS 10FL.OZS.] [TM.REG.U.S.PAT.OFF.] の記述あり
5	「バヤリース」	5.5cm	24cm	0.40kg	10FL.OZ. (296ml)	なし	山村硝子 (65年頃までの型)	1969?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部) エンボス(両部)	[NET CONTENTS 10FL.OZS.] [TM.REG.U.S.PAT.OFF.] の記述あり
6	「バヤリース」	5.3cm	24cm	0.42kg	296ml (10FL.OZ)	なし	山村硝子 (65年頃までの型)	1971?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部)	
7	「バヤリース」	5.3cm	24.0cm	0.42kg	296ml (10FL.OZ)	なし	山村硝子 (65年頃までの型)	1971?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部)	
8	「バヤリース」	5.8cm	23.8cm	0.42kg	296ml (10FL.OZ)	なし	山村硝子 (65年頃までの型)	1972?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部)	
9	「バヤリース」	5.5cm	23.8cm	0.42kg	296ml (10FL.OZ)	なし	山村硝子 (65年頃までの型)	1972?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部)	
10	「バヤリース」	5.3cm	24cm	0.40kg	296ml (10FL.OZ)	なし	山村硝子 (65年頃までの型)	1972?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部)	
11	「バヤリース」	6.5cm	28cm	0.50kg	500ml	なし	東洋ガラス 滋賀工場	1972以降?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部)	
12	「バヤリース」	6.5cm	28cm	0.48kg	500ml	なし	東洋ガラス 滋賀工場	1972以降?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部)	
13	「バヤリース」	5.8cm	23.8cm	0.42kg	296ml (10FL.OZ)	なし	山村硝子 (65年頃までの型)	1973?	無色	○	○	縦ライン	ACL(両部)	
14	「バヤリース ドラフトルートビア」	5.5cm	24cm	0.42kg	296ml (10FL.OZ)	なし	山村硝子 (65年頃までの型)	不明	緑	○	○	無	ACL(両部)	

【表6】バヤリース瓶の観察

7. ベストソーダ

「ベストソーダ」瓶は計20点を対象とした。「ベストソーダ株式会社」の概要はII章で述べたとおりであり、島内資本飲料を代表する品ともいえる。1970年版『沖縄工業要覧』には、本社・工場は「浦添市字勢理客1の1(ママ)」とあり、「市」が「村」になっていることを除けば瓶に表記される住所と一致する。風味はクリーム、レモン、ストロベリー、レモンライム、グレープがあり、他に「ルートビヤ」や先に述べた「ダブルコーラ」なども販売していた(琉球工業連合会1970)。尚、1970年7月1日をもって「浦添村」は「浦添市」に移行するが、対象資料には、後述する方法によりそれ以降に製造された可能性が考えられるものも含めて、全てに「浦添村」の記載があった。市への移行後も全ての瓶に「浦添村」表記が使われていたのか、ある時期を境に「浦添市」表記になったのか現時点では判断でき

ないが、本稿では市への移行後も「浦添村」表記が使われていた前提で年代の検討を行った。

底面に陽刻される数字は、確認できたものでは「59」～「73」を示す。ナーリング加工のないものが No.1、No.2 の2点あり、No.2には「59」のエンボスが確認できること、1章で述べた「ベストソーダ」の生産流通期間である1953～75年頃と概ね一致することから、この数字は西暦の下2ケタであると推定できる。底面の数字が若い順に並べてみると、以下のような順でデザインの変遷をみるのがわかる。

No.	W 幅(横)	H 高さ	重量	質量	製造者・住所	ビン製造者	推定製造年代	色調	ナーリング	ラグ・ディンプル	ラインの形態	商標表示法	メモ
1	5.7cm	22.3cm	0.40kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	日本硝子	1959?	無色	×	×	無	エンボス (胴部、胴部、底部)	肩部下に「ベストソーダ全社」「ベ ストソーダ合資会社 所有瓶」の 種別あり。
2	5.5cm	22.0cm	0.38kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	不明	～1960年代?	無色	×	○	無	ACL(胴部)	
3	5.5cm	22.0cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	山村硝子 (65年頃までの型)	1966?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) エンボス(底部) ACL(胴部)	
4	5.5cm	22.0cm	0.38kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	山村硝子 (65年頃までの型)	1966?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) エンボス(底部) ACL(胴部)	
5	5.5cm	22.0cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (工場不明)	1967?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) エンボス(底部) ACL(胴部)	
6	5.5cm	22.0cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	不明	1967?	無色	○	○	無	ACL(胴部)	
7	5.5cm	22.0cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1968?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
8	5.5cm	22.0cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1968?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
9	5.3cm	22.0cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1969?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
10	5.5cm	22.0cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1970?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
11	5.5cm	22.0cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1970?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
12	5.5cm	22.0cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1970?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
13	5.5cm	22.0cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1970?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
14	5.5cm	22.3cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1970?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
15	5.7cm	22.0cm	0.38kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1971?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
16	5.7cm	22.0cm	0.38kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1971?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
17	5.7cm	22.0cm	0.38kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1972?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
18	5.7cm	22.0cm	0.38kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1972?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
19	5.7cm	22.0cm	0.38kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	1973?	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	
20	5.3cm	22.3cm	0.36kg	207ml (7FL.OZ)	ベストソーダ株式会社 浦添村字勢理客1-1	石塚硝子 (愛知工場か)	不明	無色	○	○	無	エンボス(胴部) ACL(胴部) エンボス(底部)	

【表 7】ベストソーダ瓶の観察表

時期的には「Ⅳ期」に属する No.6 のみ、例外的に「Ⅱ期」のデザインにもかかわらず「67」のエンボスがみられるが、「Ⅱ期」の底面デザインは、数字のエンボスが向かって中央右に位置しており、ロゴ商標の下に陽刻される「Ⅰ期」「Ⅲ期」「Ⅳ期」と一線を画する。同じく「Ⅱ期」に属し、同型のデザインを持つ No.2 の底面の数字エンボスは読み取りが困難であることもあり、この「67」が製

分類	No.	変遷
Ⅰ期	1	肩部に文字商標「BEST SODA」、胴部、底部にロゴ商標がそれぞれ陽刻される。
Ⅱ期	2,6	Ⅰ期と同じ肩部に「BEST SODA」「ベストソーダ」の ACL 印刷が施される。Ⅰ期で肩部及び底面にあった商標のエンボスが消失する。
Ⅲ期	3,4	「BEST SODA」「ベストソーダ」の ACL 印刷はⅡ期のままに、Ⅰ期にあった文字商標、ロゴ商標のエンボスが同位置に復活する。底面にナーリング加工が現れる。
Ⅳ期	5,7 ～20	肩部及び底面のエンボスはⅢ期のままに、文字商標「BEST SODA」が消え、Ⅱ期までより小さい字で「ベストソーダ」と ACL 印刷される。

【表 8】ベストソーダ瓶の変遷

造年を意味するのか、別の意味を持つのかは推定が難しい。底面のナーリング加工は確認できるため（No.2 には確認できない）、仮にこの数字エンボスが製造年を意味していて、1967 年製である場合、上記の「IV期」の時期に「I期」の瓶も製造されていたことになる。

製瓶業者は「I期」にあたるNo.1のみ「日本硝子」製で、「II期」のデザインを持つNo.2、No.6は不明、「III期」のNo.3、No4は「山村硝子」、IV期No.5、No.7～No.20は「石塚硝子」のロゴをそれぞれ持ち、時期ごとに変わる瓶のデザインによって製瓶業者がすみ分けられていることがわかる。縦ライン、スワールラインなどのラインは持たず、肩部から胴部にかけて滑り止めが施されている。

以上は本市教育委員会所蔵資料のみを対象とした分類及び検討であり、「ボトルライブラリー」によると英文表記があるものや他商品の瓶を使ったものなど、他にも様々なタイプの個体がある。上記の分類が「ベストソーダ」瓶一般に広く適用できるか否かを明らかにするには、さらに多くの資料を対象とした調査及び検討を要することになろう【図18～21】。



【図18】 I期 外観及び底面



【図19】 II期 外観及び底面



【図20】 III期 外観及び底面



【図21】 IV期 外観及び底面

IV 小結 今後の課題

これまで、清涼飲料水瓶の品目ごとに観察表を作成し、分析・考察を試みてきたが、前章で掲載した品目それぞれの観察表にあるようなデータを収集し、文献やウェブサイトなどで得た情報と照合することで、大まかな年代が推定できることを確認した。以下では、本稿での分析の結果及び今後の課題を、いくつかの項目に分けて論じることとした。尚、ここでは、前章では解説を割愛した品目についても掲載することとする。

1. 製瓶業者の問題

本稿で対象とした資料には、確認できるものでは、米軍が持ち込んだとみられる戦地用モデルのコーラ瓶（桜井分類によるⅢa式1類）は米国「Owens-Illinois-Grass」社製、その後のものは「日本硝子」「山村硝子」「石塚硝子」「新東洋硝子（東洋ガラス）」社製のものが見られた。これらはいずれも沖縄県外の業者である。沖縄の日本復帰前から、「手吹きによらない工業生産のジュース瓶は、すべて県外から輸送されてきたもので、沖縄で機械生産されたことはない」ことが指摘されているが（河西 2018）、それを裏付ける形となった。その他、一部の古い島内資本飲料には製瓶業者のエンボスがなく、業者が特定できないものもある。また、飲料会社や品目により、製瓶業者に偏りがあることも指摘できる。製瓶業者別に、比較的多くみられる品目を列挙した【表 26】。

表にあげたように、品目と製瓶業者との関係には一定の傾向がみられることがわかる。主に牛乳瓶の解説を対象とするウェブサイト「漂流乳業」は

手元在庫のうち、ダントツの一番は石塚硝子製。次いで東洋ガラス、山村硝子、日本硝子の順。日本硝子は昭和 40 年以前、山村は同年以降に多い。この 4 社で約 7 割をカバーする。

と述べている。今回の対象資料である清涼飲料水瓶のうち、「日本硝子」製は 1950～90 年代製までまんべんなく見られ、「山村硝子」も 1950 年代頃から見られる。また「石塚硝子」は「ベストソーダ」瓶で高い割合を見せたものの絶対数は多くないことから、「ダントツの一番は石塚硝子製」「日本硝子は昭和 40 年以前、山村は同年以降に多い」の部分は必ずしも当てはまらないが、「この 4 社で約 7 割をカバーする」とあるように、主要なシェアを占める業者は牛乳瓶とも共通していることを伺わせる。牛乳瓶や酒瓶など、清涼飲料水瓶以外の瓶との比較研究も今後課題となろう。

また、Ⅲ章「バヤリース」の項で述べたように、製瓶業者の商標エンボスについて、先行研究で示されている年代と本稿での推定年代にややずれが出る例も確認できた（桜井 2019, 栗原 2005）。

2. 含まれるラインの問題

桜井は型式学における失能的成体（痕跡器官）がコーラ瓶など現代的資料の中にも存在しているとし、コカ・コーラ瓶にはⅢ式以降に「縦ライン」、ペプシコーラ瓶にはⅠ式に「ウェーブライン」、Ⅱ式以降にはこれを継承した「スワールライン」が含まれ、その名残は今日一般的に使用されるペットボトル製品まで受け継がれていると指摘した（桜井 2019）。分析の結果、島内資本飲料瓶にもコカ・コーラ

製瓶業者名 (順不同)	品目 (順不同)
日本硝子	コカ・コーラ系製品
山村硝子	ミスターコーラ、ボンジュース系製品、バヤリース、レモンソーダ、キープ、ジャスタ、ラッキーコーラ
石塚硝子	ベストソーダ、グラペット
新東洋ガラス (東洋ガラス)	7UP、ミネラル

【表 9】製瓶業者別 多く見られる品目

瓶、ペプシコーラ瓶のデザインを模倣したようなものが見られ【図 15】、【図 16】、「縦ライン」、「ウェーブライン」、「スワールライン」のようなラインが含まれるものも確認できた。加えて、「縦ライン」「スワールライン」どちらの系統にも含まれない文様として、カナダドライ「レモンソーダ」の「網目状エンボス」、「ファンタ」の「横巻きライン」、「OK コーラ」、「クイーンコーラ」、「ミネラル」の「モザイク」があげられる。

ラインの形態	品目（順不同）
縦ライン	コカ・コーラ、ボンジュース系製品、バヤリース99、バヤリースCOLA、バヤリース、ひばりジュース、キープ
ウェーブライン	ペプシコーラ（桜井分類Ⅰ式）、ラッキークーラ
スワールライン	ペプシコーラ（桜井分類Ⅱ、Ⅲ式）、ミリンダ、ダブルコーラ、ミッション
その他	レモンソーダ（網目状）、OK コーラ（モザイク）、クイーンコーラ（モザイク）、ミネラル（モザイク）、ファンタ（横巻き）

【表 10】ラインの形態と品目

Ⅲ章「ペプシコーラ」の章にて、コカ・コーラ瓶とペプシコーラ瓶に代表される「縦ライン」と「ウェーブライン」及び「スワールライン」は清涼飲料水瓶における2大様式と捉えることもできる旨を述べたが。このほかにも、考古学における「様式」と呼べるような文様があるのか否かを明らかにするには、さらに多くの資料の検討が必要となろう。

3. 色調の問題

本稿で対象とした資料では、無色、青緑色、水色、緑色の3種類の色調を確認した。このうち無色は数が膨大であることから割愛し、青緑色、水色、緑色の瓶をもつ品目を列挙した【表 26】。

表から、コーラ系は水色または青緑色、コーラ以外の炭酸飲料は緑色と、くっきり分かれることがわかる。水色及び青緑色の瓶には1950年代に発売された島内資本業者の製品が多く、形状もコカ・コーラのホップル瓶と似通うものが多いため【図 12、13】、コカ・コーラ瓶の影響とも考えられる。一方、緑色の瓶はコーラ以外のソーダやサイダー系の飲料に多く見られており【図 22、23】、ラムネ瓶やサイダー瓶に緑色が多く見られるとする桜井の指摘に一致する（桜井 2019）。緑色の瓶が使用されていた製品のうち、現在でも親しまれている「スコール」、「マウンテンデュー」、「スプライト」、「7UP」は、ペットボトルや缶容器においてもそのまま緑を基調としたデザインにて販売されている。色のついた瓶は、主に茶色が中心であるビール瓶などとともに、「琉球ガラス」の原料となりその色彩にも影響を与えた（河西 2018）。

色調	品目（順不同）
青緑色	コカ・コーラ、ミスターコーラ
水色	ボンコーラ、サンコーラ、OK コーラ、ハートコーラ、クイーンコーラ
緑色	スコール、レモンソーダ、オリオンサイダー、バブルアップ、マウンテンデュー、スプライト、7UP、バヤリース 99、バヤリース ドラフトルートビア

【表 11】瓶の色調と品目



【図 22】緑色の瓶(左からスコール、レモンソーダ、オリオンサイダー、バブルアップ)



【図 23】緑色の瓶(左からマウンテンデュー、スプライト、7UP)

4. 製造年代の問題

前章で対象資料の製造年代推定を試みてきたが、米国製の戦地用モデルの「コカ・コーラ」瓶（桜井分類Ⅲa 式 1 類）は 1940 年代製、その後、戦後に沖縄で飲まれていたとみられる飲料は推定 1950 年代製から 90 年代製のものまでまんべんなく確認できた。年代推定の目安は主にラグ・ディンプル及びナールリング加工の有無、瓶の形状や装飾、製瓶業者商標エンボスなどのデザインの変遷、数字エンボスの数値の大小などによる。

5. 資料の収集方法、採集地

本稿で対象とした資料がどのような方法で入手され、またどのような場所で採集されたのかについては、Ⅲ章で掲載した品目ごとの観察表では記載を割愛したが、入手方法については、主に個人による寄贈によるものと、本市教育委員会による埋蔵文化財発掘調査などの際に表面採集（表採）されたものが確認できた。対象資料総数 172 点のうち、記録があるもので「表採」は 119 点を占めており、寄贈などで直接本市文化課に寄せられた 32 点を大きく上回っている。記録されている市内における採集地（字名）は字豊見城、字宜保、字保栄茂、字真玉橋、字根差部である。寄贈者の入手方法は購入のほか、自宅の庭や墓などの工事の際に発見したものが見られた。これらの情報については不明のものも多く見られたため、今後ともしっかりと記録していく必要がある。

V 提言

前章まででは、対象資料の分析結果及び今後の課題を述べてきた。本章では締めくくりとして、ガラス瓶、及び清涼飲料水瓶が持つ博物館における展示資料として、また学術的な研究対象としての可能性について、現時点での筆者の考えを提示しておく。

ガラス瓶とデジタルアーカイブ

本稿では、「ボトルライブラリー」や「漂流乳業」をはじめ、いわゆる「コレクター」と呼ばれる人々が個人で開設するウェブサイトを参照した。情報の少ない島内資本飲料のことなど、ウェブサイトではしか知りえない情報も少なくない。既に何度か触れたように、ガラス瓶はかねてよりコレクターによる収集、研究が盛んな品であることから、コレクター自身の収集品による展覧会もこれまで数多く開かれている（角南 2019）。

考古学と地域住民などとの関係構築を考える「パブリック・アーケオロジー²⁵」の概念が 1970 年代に米国で提唱され、日本にも紹介されて久しいが、角南聡一郎は「出土ガラス瓶の展示は（地域性があることから）地元受けする場合が多い」「パブリック・アーケオロジーの素材としてのガラス瓶は、出土資料に限定されることなく伝世資料とともに意味を成すことが肝要であろう」とし、ガラス瓶がパブリック・アーケオロジーに果たしうる可能性について示唆した。このことは、やはり寄贈などによる伝世資料が多くあり、かつて県内で親しまれていた商品であったガラス瓶を資料化し、デジタルアーカイブとしての公開を目指す我々にも、少なくないヒントを与えてくれる。それまで人目に触れることのなかった資料がインターネット上で公開されることで、例えば県内外のコレクターやかつての愛飲家などから、我々が知りえない思わぬ情報が寄せられることがあるかもしれない。むろん、分野を問わず学術的

²⁵ 松田陽、岡村勝行は「考古学と社会との関係を研究し、その成果に基づいて、両者の関係を実践を通して改善する試み」と定義する。「公共考古学」、「市民考古学」などの訳語があてられることもあるが、両氏による入門書では、いずれもニュアンスを十分に表さないとして「パブリック・アーケオロジー」の語を使用しており、本書でもそれに準拠した（松田陽・岡村勝行 2013）。

な研究の進展に寄与することも可能となろう。そのためにはしっかりと資料情報の記録と資料写真の撮影が不可欠であり、その方法論については未だ検討の余地があるものの、「地域のための考古学」というパブリック・アーケオロジーの理念に対して、デジタルアーカイブが果たしうる役割は決して小さくないものとする。

一方で、外資、島内資本問わず、沖縄で清涼飲料水メーカーが興隆した背景には、言うまでもなく戦後27年間に及ぶ米軍統治時代があり、その中で現在に遺された清涼飲料水瓶にいかなる評価を与えていくのかは、沖縄戦後史の研究も踏まえつつ、今後我々自身が取り組んでいくべき課題であることを述べて、本稿の結びとしたい。一つ言えるのは、ガラス瓶が単にノスタルジーに浸る道具のようになってしまうことには危惧も覚える、ということである。

※拙稿を丁寧に添削の上、ご指導いただきました本市教育委員会文化課の皆様に感謝申し上げます。

引用参考文献

- 海野文彦 2012「ベストソーダ」『おきなわ懐かし写真館 復帰前へようこそ』pp58-63 ゆうな社
大宜味朝徳 1957『沖縄商工名鑑』沖縄興信所
沖縄県工業連合会 1974『沖縄県工業要覧』沖縄県工業連合会
沖縄県立埋蔵文化財センター2019『神山古集落』沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2022『普天間石川原第一遺跡 普天間グスクンニー遺跡 普天間下原古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄コカ・コーラボトリング株式会社 2018『50年のあゆみ』沖縄コカ・コーラボトリング株式会社
河西大地 2018『琉球ガラスの年代物コレクション～沖縄ガラス工芸図鑑～』白雨草木庵
栗原岳 2005『横浜骨董ワールドガイドブック Vol.7』横浜骨董ワールド事務局
河野昭三・村山貴俊 2008「Coke VS. Pepsi；沖縄1945～1972年（その2）」甲南大学経営学会編 2008『甲南経営研究 第49巻 第2号』pp1-38 甲南大学経営学会
桜井準也 2019『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房
佐藤俊 2021「霊山山頂採集のコカ・コーラ瓶について」福島県文化振興財団遺跡調査部編 2021『福島県文化振興財団遺跡調査部_調査研究コラム 90号』pp1-4 福島県文化振興財団
當眞嗣一 1984「戦跡考古学のすすめ」『南島考古学だより 30号』沖縄考古学会
南風原町教育委員会 2000『南風原陸軍病院壕群Ⅰ』南風原町教育委員会
西原町町史編纂委員会 1996『西原町史 第5巻 資料編4 西原の考古』西原町役場
平成ボトル倶楽部 2017『日本のレトロびん』グラフィック社
前田勇樹 古波藏契 秋山道宏 2021『つながる沖縄近現代史』ボーダーインク
松田陽・岡村勝行 2013『入門パブリック・アーケオロジー』同成社
山本孝造 1990『びんの話』日本能率協会
琉球工業連合会 1970『沖縄工業要覧』琉球工業連合会

参考 Web サイト

- 「沖縄アサヒ飲料 沖縄バヤリース」https://www.asahiinryo.co.jp/okinawa_bireleys/sp/ (2022年3月24日閲覧)
沖縄タイムス 2015年1月28日付「サンサンクリームソーダも引き続き販売 沖縄県限定」
<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/10320> (2022年3月25日閲覧)
角南聡一郎 2019「増補 ガラス瓶の考古学 書評 六一書房」HP https://www.book61.co.jp/book_review.php/140 (2022年3月18日閲覧)
「日本ガラスびん協会」<http://glassbottle.org/about/factory/> (2022年3月18日閲覧)
「漂流乳業」<https://www.citymilk.net/info.htm> (2022年3月10日閲覧)
琉球新報 2015年3月25日付「“ペプシ”社名から消える サントリーフーズ沖縄に」<https://www.ryukyushimpo.jp/news/preentry-240891.html> (2022年3月25日閲覧)
「ボトルライブラリー」<http://www.cosmos.ne.jp/~norioa/bin.htm> (2022年3月22日閲覧)
「SUNTORY 商品情報 マウンテンデュー350ml」<https://products.suntory.co.jp/d/4901777045682/> (2022年3月24日閲覧)
「愛のスコール デーリィ南日本酪農協同」<https://www.dairy-milk.co.jp/skal/> (2022年3月25日閲覧)